

随 想

次期総会をひかえて

新 島 端 夫*

月並みな言い方ではあるが、“時のたつのはまことに早いもの”という言葉が、実感として身にせまる昨今である。

1973年春、第63回総会の岡山開催が決まった時は、まだ2年先のことという落着きと、2年あれば何とかなるだろうという安易感があったが、さてここで振り返ってみると、ただなすことなく過ぎたという空しさのみを覚えるのである。

どだい、昔から、さしせまらぬと調子が出ず、怠け者の節制働きが習慣として身につけている小生は、事の大小にかかわらず、死ぬまで、この思いを繰返し味わねばならぬのであろう。

次期総会は、いちおう第19回日本医学会総会（4月5～7日、京都）の分科会ではあるが、実際には例年の総会と同様、開催地、会期ともに泌尿器科学会独自の選択によって決められ、4月25～27日岡山で開かれる。

これは、多くの分科会が時期、開催地を同じくしておこなわれる従来の医学会総会の形式が、分科会にもたらすデメリットを考慮し、今後その会期、開催地を拘束しないことに方針を変えたからである。

岡山は比較的京都に近いこともあり、医学会総会に接して会期を設定することも考えられ、また事務当局よりのご希望もあったが、1週余にわたる会員各位の学会出張は、一般的にみて非現実的であるし、さらに折角の方針変更の意義をうしめることにもなるので、今回はむしろ、できるだけ離れた。日本医学会総会の将来については、さらに検討が続けられるのであろうが、私は、これを各学会の総会と全く切り離し、秋にでも、ちょうど米国の AMA Annual Convention ぐらいの規模でおこなうほうが、運営、内容両面で充実し、有利ではないかと感じている。

さて、岡山における総会につき、その企画に関し

て、2点ほど述べさせていただく。

ひとつは、一般演題吸収の手段として、本学会ではおそらく初めての試みである示説をとり入れたこと、今ひとつは、教育および招請講演として同種の演題を3つ並べたことである。

一般演題の消化のため、近頃多くの学会で複数会場方式をとっており、小生も少なからず、大学会における小会場での発表をしてきた。その経験と実感、また癌学会などにおける示説発表の実態に基づいて、今回は主会場で発表できない演題を、できるだけ示説でお願いすることにした。

複数会場また示説の是非については、多くの考え方があると思うが、とにかく、発表のひとつの手段としての示説には、それなりの長所もあり、これになれることも、むだではないと思うのである。

会場に予定した岡山市民会館は、けっして示説に適当な設備をもつわけではないし、おそらくご不満の声もあがるものと覚悟しているが、適当な会場を得、かつ今回の欠陥などが改良されてゆけば、かなり有用な手段となることも期待される。しかし逆に、この型式が、本学会においては不適當と思われれば、今後採用しなければよいわけで、いずれにしても、今回はこのテストケースにご協力をお願いしたいのである。

教育および招請講演については、最近の内外医学界のトピックともいうべき腫瘍免疫の問題にしばり、基礎、臨床領域から大家、新鋭お三かたに講演をお願いした。貴重な時間ではあるが、どうせお願いするのなら、形式に流れず、できるだけ時間をさいて、このむずかしい課題の現況に関し、充実した知識を得たいと考えたからであり、ご了解いただきたい。

何はともあれ日々寒さの加わるきようこのごろであるが、やがてくる1975年4月、陽春の山陽路で、会員諸兄のにぎにぎしいご来岡をひたすらお待ちするしだいである。

* 岡山大学教授 第63回日本泌尿器科学会総会会長